



Assisted Reproductive Technologies in Iran.

イランの生殖補助医療

Interviewee

Dr. Soraya Tremayne

Q. 専門領域、これまでの研究歴など、自己紹介をお願い致します。

社会人類学を専門にしている。イラン出身で、過去 30 年にわたりイランについて研究している。研究の大部分は医療人類学の分野に属するもので、家族、親族、結婚、不妊など、生殖に関するさまざまな側面に焦点を当てている。特に生殖補助技術（ART）に焦点を当てて、これらが文化規範、価値観、社会そのものにどのような影響を与えるかを研究している。イランで学士号を取得後、パリ・ソルボンヌ大学で博士号を取得した。

過去 40 年間、さまざまな立場で英国のオックスフォード大学に在籍している。主な経歴は以下の通り。

- ・オックスフォード大学国際ジェンダー研究センター（IGS）（旧：異文化女性研究センター[CCCRW]）所長。
- ・国際ジェンダー研究センター（IGS）所長、オックスフォード大学異文化女性研究センター（CCCRW）所長。
- ・1998 年、オックスフォード大学社会文化人類学研究所、Fertility and Reproductive Studies Group (FRSG) 設立ディレクター（現在も継続中）。
- ・今年 50 巻を迎える Berghahn Books の Fertility, Reproduction and Sexuality シリーズの創刊編集者（50 巻は自身の執筆によるもの）。

・オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジで「中東の女性の権利」セミナーシリーズを共同開催。

Q. フィールドワークをどのように実施しましたか？ ローカル言語ができるイラン出身の研究者と、外国人が調査をする場合で、どのように異なりますか？

また、イラン社会で生殖補助医療を調査する際、女性研究者であることは違いをもたらしますか？

社会人類学者である自分の主な方法論は、参与観察によるエスノグラフィー。イランでは、さまざまな地域社会で現地の人々と生活を共にし、綿密な調査を行った。

2004 年には、イラン中部の保守的な都市、ヤズドで調査を行った。早期（児童）結婚を研究するために、地元の家族と一緒に暮らした。特に、識字率の向上が早婚にどのような影響を与えるかなど、開発の影響を調べた。ちょうどその頃、イランでは体外受精や不妊治療が始まったばかりだった。一緒に暮らしていた家族やクリニックとの接触から、ヤズド（イランで最初に体外受精が行われた都市）で体外受精が行われ始めたことを知った。その結果、ヤズドで治療を受ける不妊のカップルに注目するようになった。その後、テヘランに戻り、他のクリニックや治療を求めるさまざまな不妊症の夫婦とネットワークを作り始めた。

また、40 年以上住んでいる英国を拠点に、イラン人亡命者のために法廷で使用する専門家報告書を作成したことがある。その過程で、不妊治療を求めてイランを脱出し、その結果暴力を受けた女性たちのケースに遭遇した。これが新たなデータの宝庫となり、再び集中的なフィールドワークへと発展していった。



外国人研究者が、イラン人の血を引き、イラン語ができる人と同じ成果をあげられるかどうか、単純な答えはでない。状況はケースバイケースで、この点で一般化するのには間違いだと思う。研究実施の自由度は、その時々、政治的雰囲気、に大きく左右されてきた。イランで研究を行ったさまざまな経歴の研究者や、フィールドワークを終える前に研究の中断やテーマの変更、国外退去を余儀なくされた研究者のことを知っている。例えば、イラン人ではない学生の一人は、現地で研究を始めることができたが、すぐに保守的な大統領が誕生し、対象コミュニティの中に入って生活することができなくなった。一方、自分のようなイラン人研究者は、情報源へのアクセスを容易にするネットワークを既に持っていて、公的な許可を得ることなく研究を進められることが多かった。しかし、現在の政治的な雰囲気では、誰にとっても綿密な調査を行うことは、不可能ではないにしても、非常に困難なことだと思う。

自分の経験では、性別は大きな問題にはならなかった。フィールドワークを行った当時、既に中年であったため、受け入れられやすかった。また、アウトサイダー／インサイダーという立場も、イランに住む女性とは異なる立ち位置であった。イラン人からの紹介で、一緒に暮らしている人たちから信頼されていた。人類学的な訓練を受けているため、壁の上のハエのように振る舞い、人々のセンシビリティに気を配りながら、干渉したり批判したりすることを避けて調査を行った。その結果、一緒に生活し、研究しているコミュニティのメンバーは、自発的に自分のところに来てくれ、情報を共有してくれた。もちろん、自分の観察や発見を理解し、分析し、解釈し、意味あるものにするためには、その言語と文化

に精通していることが役立ったことは間違いない。

Q. フィールドワークで出会った、印象深かった人物、会話、場面など、何でも教えてください。

2004 年当時、最も離婚率が低く、公には最も保守的な都市と分類されていたヤズドでの調査で、心を打たれたのは、聖職者たちに直接コンタクトできたことだった。大学で講師として神学を教えている男性宗教家たちを紹介された。自分は機転を利かせようと、「イスラム教は進歩的な宗教だと知っていますが…」などと前置きして話を始めたが、実際に彼らの多くが「いいえ、イスラム教は時代遅れの宗教で、近代化が必要です」と反対意見を述べたので、愕然としてしまった。彼らは自分の予想以上に前を向いていたのだった。

特に印象に残っているのは、世界銀行のミッションで、政府機関にジェンダーを主流化するための戦略を策定した時のこと。この任務では、イラン各地でジェンダーと開発に関するワークショップを開催することもあった。そのひとつを、イラン北西部にある非常に保守的な都市で行った。当初、ワークショップに参加する男性たちから敵意を向けられたが、講義が進むにつれ、参加者は自分が肩肘張ったフェミニストではないことに気づき、心を開いてくれた。イランの例を出さないようにしたところ、自分の言っていることが一方的な女性擁護の話ではなく、バランスのとれた男女の関係を提示していることをすぐに理解してくれた。そして、ある夜の 11 時頃、ワークショップの参加者の一人が、妻（女子寄宿学校の校長）を自分の家の玄関まで連れてきた。そして彼の妻は、朝方まで、少女た



ちが学校で目撃した恐ろしい話や、彼女たちが受けた暴力の数々を話してくれた。その中には、平日に授業に出ないでその理由を説明しなかったために父親に殺された少女の話も含まれていた。

また、ある若い女性に会ったときのことを思い出す。その女性は、かなりタイトで、（イランの文脈では）やや挑発的な服を着ていた。その女性にこう尋ねた。「その服を着るということは、外に出て道徳警察に逮捕されることを恐れていないのですか、それとも権力者に挑戦するためにやっているのですか」と尋ねると、女性はこう答えた。「この服のどこがいけないの？ お店で売っているものだから、着ていいのよ。」この女性の頭の中では、地元の店で売られているものだから着ることが「許されている」と受け止めており、ファッションであり、必ずしも押し付けられた服装規定を破って政治的主張をしようとしているわけではないことに気づいた。つまり、多くの研究者は、若い世代の性的行動や一部の乱れた尻軽な行動を政治的反抗のしるしと解釈してきたが、それは誤解を招く可能性がある。若者にこのことを尋ねると、多くの場合、彼らは単に普通の生活をしてセックスをしたいと答える（世界の他の地域の若者と同じである）。あらゆる行動は政治的なものと解釈されるが、こうした研究は、若い世代の行動のより単純で自然な側面、すなわち、政権に対する反抗行為としてではなく、自由で普通の生活を送りたいという願望や熱望を見逃している。

Q. ムスリムの宗教者は、生殖補助医療について fatwa を出すなど、色々と発言していますが、人々はその教えに忠実に従っていますか？ もし具体例があれば教えてください。

イランは人口の 90 パーセントが Twelver 派に属するシーア派イスラム教の国だ。イランを代表するシーア派聖職者の中には、模範となるような上級法学者がおり、彼らは、新たな状況について信者から尋ねられた質問に回答を提供している。彼らは、宗教的なテキストを参照し、ファトワーや宗教的な勅令という形で答えを出す。これらの法学者の意見は互いに異なり、矛盾していることもある。しかし、これらの意見はすべて等しく有効であり、信者は自分が選択した情報源の意見に自由に従うことができる。ART が初めてイランに導入されたとき、医療従事者たちは、これらの技術の応用が医療行為にとどまらず、家族や親族関係にも広く影響を及ぼすことを理解した。これらの技術を合法化する独立した世俗的な機関がないため、医療従事者は上級のイスラム法学者に意見を求めた。彼らの意見もあって、不妊治療のための ART が実施されるようになった。今日まで、生殖補助医療は、それに好意的な法学者が発したファトワーによって、あらゆる形で実施されている。しかし、胚提供だけは、どんなに独立した理由によってもその適用を正当化できないため、国会の法律により合法化された。

また、不妊の夫婦については、世俗的な背景を持つ者もいれば、権威者からの助言を求める者もいる。イスラム法学者の見解が多様であるため、柔軟に対応することができる。人々は自分自身の意図を追求することができ、操作の余地がある。むしろ、常に流動的な状態にある。人々は、権威者からの助言があるからという理由だけで、その治療を選択しないという決定を下すことは滅多にない。



Q. シーア派ムスリム社会では、精子・卵子提供、代理出産で生まれた子供は、どのような位置づけになりますか？

現在までのところ、イランにおいて第三者による生殖技術で生まれた子供に関する研究はない。人々は、可能な限り秘密裏にこの行為を行う。当初、不妊の夫婦は血縁関係を維持することが重要であると考え、血縁者を配偶子ドナーとしていた（例：兄弟姉妹からの提供）。しかし、時代が進み、ドナーの数が増えるにつれ、代わりに見知らぬ人からの第三者提供を選択することができることに気づいた。また、匿名での配偶子提供は、不妊であることを秘密にすることができるので、一般的になってきている。

家族内での提供は、しばしば法的、経済的、感情的な問題を引き起こした。その結果、2021年8月に超保守的な現大統領が選出される直前に、医師たちは議員たちを説得して、匿名での提供を合法化するための法案を国会に提出させた。この法案は現在一時停止になっている。

現在、ARTは人口増加のための手段として、イランの人口政策における一つの柱となっている。体外受精が導入された当初は、政府は積極的に人口を抑制しようとしていて、ARTの合法化に向けて大きな動きはなかったが、2011年には人口増加が代替水準を下回り、それまでの政策から一転して現在の出生奨励策となった。この出生奨励策は、中絶の禁止等、強制力が強いものだ。また、前はほとんど私立病院でしか受けられなかった不妊治療も、政府がクリニックに出資して行うようになった。倫理的な側面はあまり重視されなくなり、政府は単純に人口を増やすことを望んでいる。

Q. イラン社会で養子はどのような位置づけにありますか。

イスラムは養子縁組を認めていない。伝統的には、家族間で養子縁組を行っていた（例えば、兄弟姉妹に子供を与えるなど）。革命以前は、イスラム法に則っていないにもかかわらず、民法上養子縁組が認められていた。イランは、養子が認められている数少ないムスリム国だが、養子は自動的に遺産を相続することはできない。相続はあくまで血縁者に限られる。実子と比較すると、養子は親族グループや社会一般から受け入れられにくい。伝統的に養子縁組は親族間で行われ、不妊ではない夫婦や不妊の夫婦が、さまざまな理由で姪や甥を養子に迎え、子供たちは二つの家庭を行き来し、皆に愛され歓迎された。例えば、自分の父には、父の最初の妻との間にかなり年上の姉がいた。その姉夫婦には子供がいなかったため、一時期非公式に父を養子にした。その後、父は養父である姉の夫から財産の多くを受け継いだ。法律が改正されたとはいえ、イランでは相続はまだまだ複雑な問題だ。

Q. 精子・卵子提供、代理出産に際して、当事者の間で、感情面でどのような現象が生じますか。具体的な例があれば教えてください。

夫婦間の体外受精は問題ないが、第三者が介在する場合には紛争が発生する。イランとレバノンのシーア派は、第三者による生殖を認めている唯一のイスラムの管轄地域だ。イランの法学者は、第三者提供を認めるにあたって、当初、男女が一定期間の婚姻に合意する「一時婚」（シーア派でのみ行われている）に頼った。イスラムでは婚外妊娠は禁じられており、姦通とみなされるため、他人の配偶子を受け取ることを正当化するために



一時婚が提案された。この方式では、妻が不妊の場合、卵子ドナーと夫は肉体関係を持たずに一時婚をすることで、提供を正当化し、姦通の問題を解決している。

男性不妊の場合、状況はもっと複雑になる。男性は一度に複数の妻を持つことができるが、女性は複数の夫を持つことができない。精子ドナーを利用するためには、夫と離婚し、3カ月ほど妊娠していないことを確認した上で、ドナーと一時的な婚姻関係を結び、新しい夫から精子を提供してもらう必要がある。しかし、この方法はあまりに複雑なため、ほとんど実行されなかった。最終的には、一時的な婚姻を前提としない精子提供を認める高齢の法学者もいたが、これは社会的な反発を招いた。家父長制が根強くあり、子供は父親のものであり、他人の精子を使うことは父親の血筋を途絶えさせることになるからである。現在でも、精子提供はごく少数のクリニックで行われているが、注意深く目立たないようにして行われている。

第三者提供には、さまざまな葛藤がある。卵子ドナーが生まれた子供を欲しがったり、卵子ドナーが依頼親に搾取されたり、使用人のように扱われたりと、様々な事例がある。特にドラマチックなのは、ある女性が姉妹に卵子を提供し、子供が生まれた例だ。その後、卵子ドナーの実の子供が事故で死亡したため、姉妹が産んだ子供を、自分が提供した卵子だから自分の子供だと主張し、裁判になった。結局、裁判所は卵子ドナーを支持する判決を下し、レシピエント女性が産んだ子どもは遺伝的母親(ドナー)のもとに戻された。これは、もともと第三者提供を認めるファトワーが出されており、それに従った判決であった。それは、子供は遺伝的親(ドナー)に属し、遺伝的親(ド

ナー)から相続するが、名前は育ての親のものを名乗るというものである。このようなシナリオは、クリニックにとって多くの問題を引き起こすので、クリニックは配偶子提供の匿名化を求めた。イランには全国的な DNA データベースがないため、匿名が合法化されれば、子どもは遺伝的親(ドナー)を探すことができなくなる。

Q. 不妊カップルに対して、体外受精以外に、伝統医療の利用や何らかの慣習などがありますか？それはどのような役割を果たしていますか？

人々は伝統的な医学の選択肢をまだ信じている(どの程度かは自分にもわからないが)。イランで ART が普及し始めた頃、不妊のカップルは大都市に治療を受けに来て、妊娠すると「地元のヒーラーの力を借りて妊娠した」と帰郷することがあった。30 年前、治療家の魔法による妊娠は理解され受け入れられていたが、ART による不妊治療は新しく、一般にはほとんど知られていなかったため、その利用には疑いと心配が持たれていた。

Q. 授乳と kinship の関係について、教えてください。卵子提供や代理出産の際、この考え方は、どのように働きますか？

Milk Kinship というのは、イスラームにおける血縁関係の一形態で、女性が他人の子供に母乳を与えることで、その子供と生物学的に血縁があるとみなされるもの。また、その女性の家族も血縁関係にあるとみなされる。その結果、結婚、近親相姦、姦通を含むイスラームの親族関係のルールが、2つの家族の間にも適用される。



卵子提供に頼った不妊の女性のなかには宗教的、保守的な女性もいて、他人の卵子を使うことに罪悪感を感じ、「私は罪を犯している、神が私を許してくれますように」と口にしたのを聞いたことがある。しかし、「授乳によってその子供が自分の実子になると思うと安心する」といっていた。

Milk Kinship は、これまで公にはあまり議論されてこなかった。

Q. 息子を産んだが、その後、亡くしてしまった場合、(閉経後の)高齢の女性が卵子提供で子を産むような事例は見られますか？

個人的にそのようなケースに遭遇したことはないが、そのようなケースが存在しうことは認識している。高齢の女性への体外受精の実施については、各クリニックが独自のルールを持っているため、クリニックによって対応はまちまちだ。

Q. イランで、配偶子提供や代理出産は商業化されていますか？ どのように？ それは、政府によって容認されていますか。

先に述べたように、ART を合法化する法律が制定されていないため、政府はART の制度化にも施行にも深く関わっていなかった。当初、提供は「ギフト」であり、ドナーが親族であれば金銭的な問題はなかったが、ドナーが他人である場合、必ずしもうまくはいかない。そこで、クリニック側は「費用」をリストアップし、ドナーに支払うことを正当化した。もちろん、代理出産は配偶子提供よりはるかに高額である。当初は、代理出産をする女性には大きなスティグマがあり、近親者しか志願しなかった。現在で

は、代理出産は非常に人気があり、商業化されている。

代理出産を知った女性が、お金を必要としてボランティアとして参加するようになってから、感情的な動機や親族への義務に縛られていた初期の頃とは変わってきている。本来、代理母は結婚していなければならないが、多くの規則が破られている。それは卵子ドナーについても同様で、本来、卵子ドナーは自分の子供がいることが前提だった。

一般的に、ファトワーが不明確であったり、矛盾していたりするため、操縦の余地があり、関係者がそれぞれの思惑に従って、流動的な不妊治療を行うことが可能になっている。

Q. 西欧社会では、子供はテリングを受けるべき、出自を知る権利を認めるべきだという声が強くなっています。イランで今後、こうした議論が展開する可能性がありますか？

イランでは家族の規模が縮小し、子供が一人、あるいは一人もいない家庭もある。しかし、親族関係に付随する価値観は根本的に変わっていない。生殖をめぐる文化的価値観は、近い将来に消滅することはないだろうと考えている。

イランの近代化は、例えば、家族の規模や若者の出会いや結婚の仕方など、生殖に関する社会的側面を変えたかもしれないが、生殖行為に関する基本的な価値観は大きく変わってはいない。私たちはしばしば、その社会が受けた変化で判断するが、社会のかなりの数の人々の間で変化せず存続し、最終的に変化の起こり方を決定しているものを見落としている。たとえ人口の半分が西洋の近代的な価値観に従ったとしても、伝統的な文化習慣を守る人々はまだ大勢いる。例えば、自分の教え子の一人は、イギリス人



と結婚した。その後、彼女の母親は丸2年間、彼女と口をきかなくなった。彼女の家はそれほど保守的でもなかったのだが、それでもこの事態は大きな葛藤を引き起こした。このように、イランの文化は、イラン社会で「容認されている」ものよりも、しばしば遅れている。

Q. 現在または今後の研究について。

現在、イランで新しい研究をしていない。現在は、30年にわたる研究の成果を、祖母から5世代にわたる世代間交流の視点からまとめた本を執筆中。この本では、生殖に関する慣習がどのように変化したのか、どの程度、どのような形で変化したのかを調べている。

(2022年10月)

Dr. Soraya Tremayne [Link](#)

イラン出身。オックスフォード大学の社会文化人類学研究所研究員であり、Fertility and Reproduction Studies Group (FRSG) の共同設立者でもある。

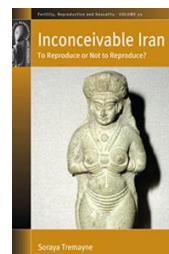
イランで学士号を取得後、パリのソルボンヌ大学で博士号を取得。過去30年にわたりイランについて研究している。

ベルガー・ブックスのFRSG出版シリーズ(Fertility Reproduction and Sexuality)の編集者の一人でもある。

著書：

Berghahn Series

Fertility, Reproduction and Sexuality: Social and Cultural Perspectives 1-52



- Berghahn Series Volume 50
INCONCEIVABLE IRAN
To Reproduce or Not to Reproduce?
Soraya Tremayne Published: 2022



- Berghahn Series Volume 23
ISLAM AND ASSISTED REPRODUCTIVE TECHNOLOGIES
Sunni and Shia Perspectives
Edited by Marcia C. Inhorn and Soraya Tremayne Published: 2012